

工業高校生及び工業高等専門学校生の、職業教育観と 職業志向に関する国際（日本—イタリア）比較研究

International Comparative Studies On The Views For Vocational Education and Vocational Aims of The Technical High School and Technical College Students

田中夏子*
Natsuko Tanaka

はじめに——本稿のねらい

本稿のねらいは、中小製造業集高積地（電機、機械金属）における工業高校生、工業高専生の、仕事及び生活に関する価値意識の構造について考察を試みることにある。

日本の学校はいうまでもなく、生徒たちが「仕事の世界」へと参入していくにあたって大きな介入を果たす。荻谷氏が示す通り、そこには教育と経済との「逆説的ではあるが同時に相補的」な関係が存在している（荻谷剛彦、『学校・職業・選抜の社会学—高卒就職の日本的メカニズム』、東京大学出版会、1991年）。生徒たちは、進路指導を通じて、それまで抱いていた漠とした仕事のイメージを、メリトクラティックな位置づけの中で捉えるようになり、学業成績との対応関係の中で就職先を確定していくという。

しかし進路指導本格化以前の段階において生徒たちが抱く仕事観は、必ずしもメリトクラティックな方向付けと親和的なもののみとはいえない。彼らは、素朴であれ、どのような仕事観を抱いているのか、また仕事のメリトクラティックな位置づけに対し、どういった感情を抱いているのか…。彼らは、学校生活の中でのみならず、父母の言動を通じた家庭生活の中で、あるいはアルバイトのような社会生活の中でも、「仕事」のイメージを形成していく。彼らの仕事観とその背景となる生活価値についての考察が本報告の課題で

ある。

本報告の構成は以下の通りである。

1. 調査の概要 及び 対象校の概略とその対象校が位置する地域の産業的特徴
2. 工業高校生、高専生の生活価値と学校に対する考え方、及び仕事観と職業志向—調査結果から
 - [1] 対象者の基本属性—父母職業、父母学歴
 - [2] 家族・家庭に対する考え方
 - [3] 生活価値
 - [4] 学校生活をめぐる意識
 - [5] 「何を学んだか」についての自己認識
 - [6] 「仲間志向」の高さ
 - [7] 学歴社会に対する抵抗感
 - [8] 雇用労働に対する考え方
 - [9] 仕事の価値に対する判断基準
3. 小 括

1. 調査の概要 及び 対象校の概略とその 対象校が位置する地域の産業的特徴

本稿に示される調査結果は、国際学術研究「非重化学工業地域における内発的発展と青年教育の改革の国際比較」(研究代表者 北海道大学高等教育機能開発センター教授 小林甫/1993~1995)の一環として、昨夏来、国内4箇所(長野、岐阜、東京、小樽)および国外2箇所(イタリア—ヴェネト州、ロシア—サハリン)で実施した工業

* 講師

高校生、高専生対象のアンケート調査に依拠している。

本稿で取り上げるのは、このうち長野、岐阜、東京、イタリアーヴェネト州の4地域である。工業高生の職業意識を方向づける要因には、地域の産業基盤、地域労働市場の動向、その地域社会の社会的・文化的土壌、各学校のカリキュラムや教育方針、職業高校の社会的位置づけなど、様々なものが考えられる。とりわけ対象地域の産業構造が格段に異なる場合、比較の軸は、「国別の制度や文化」に加えて「産業的特質」「労働市場の構成」など重層化せざるを得ない。そこで今回の分析においては、「国際比較」軸によって日本側の特質の浮上を容易とするために、製造業（電機、機械金属）に携わる中小企業の集積地であり、地域の産業的特質に一定の共通性が認められる上記4地域を検討対象とした。

対象校の概要および、その対象校が立地する地域の産業的特質は以下の通りである。

●長野県東信地域

対象校A

概要 要：工業科（建築科、機械科、電子機械科、電気科）の他、商業科、家政科をおく総合校。

調査対象：機械科、電子機械科に所属する3年生65名（うち女性0人）。

地域的特徴：長野県は、製造業従業者比率からすると1993年現在全国11位に位置する（28.4%）が、A市はその長野県の中でも製造業への特化が著しい地域（同率35.3%）である。また、金属・機械工業の中小企業集積地坂城町に隣接し（同町の製造業従業者比率は48.6%）、同町からは毎年平均して20名近くの入学者がある。

卒業生の動向：調査対象者となった平成7年度卒業者のうち就職者は約4割を占めるが、このうち機械、電子機械科出身就職者25名全員が、県内（地元通勤圏）に就職。また業種別には同25名中17名（68%）が製造

業に従事、その他は建設設備、小売・卸、運輸・通信となっている。

●東京都城南地域

対象校B

概要 要：工業高等専門学校（機械工学科、電子工学科）

調査対象：機械工学科、電子工学科に所属する5年生93名（うち女性3名）

地域的特徴：工場数、従業者数、製造品出荷高ともに東京都下市区町村中第一位、また一般機械器具製造業、および金属製品、電気機械器具製造業で都下従業者の約6割をかかえる大田区との隣接地域に位置する。入学者の出身は都内全般に及ぶが、その約2割は大田区出身者となっている。また地元品川区出身者と並んで、城東の江戸川区からも平均役1割強の入学者が見られ、総じて、都内中小企業製造業集積地からの入学者が目立つ。

卒業生の動向：約8割が就職、1割強が進学、1割弱が自営業。就職者の業種別動向を見ると、約7割が製造業、エンジニアリング関係など専門サービス業が2割弱となっている。

●岐阜県南部

対象校C

概要 要：機械科、電子機械科、土木、工業化学、電気、電子、テキスタイルデザイン科によって構成される総合校。

調査対象：機械科3年生76名（うち女性0名）

地域的特徴：C市はアパレル製品の全国的産地であるが、同時に金属プレスなど機械金属製品製造に関わる小企業の集積地でもある。特に県南部は中京、東海地方の自動車産業、航空機産業の下請け業者が密集する。

卒業生の動向：調査対象者となった機械科・電子機械科卒業生の進学率は約3割。また機械科就職者については、ほとんど製造業に従事し、県内就職

者約7割、愛知県への流出約3割となっている。ただし、県南地域は、愛知県と隣接するため、県外流出が単純に地元脱出を意味するわけではない。

●イタリア北東部ヴェネト州

対象校3校

所 在：ロッシン（ヴィチエンツァ市）—IT
（文部省管轄技術高校）
ランペルディコ（ヴィチエンツァ市）—IP（文部省管轄職業高）
スクオーラ・グラフィカ・サン
ゼーノ（ヴェローナ市）—CFP
（州管轄の職業訓練機関）

調査対象：上記3校に学ぶ342名（学科—機械、電子、印刷、金属—は問わず）、3～5年（CFPは3年）。

地域的特徴：ヴェネト州は、近年のサードイタリアー論で多くの着目を集めた地域である。大企業の傘下から相対的に独立的な中小企業の集積が見られる点、若年の起業や中小企業間のネットワークを支える公的支援が存在する点、消費財（アパレルや家具）にとどまらず、その生産に必要な設備財（繊維機械、工作機械、石材加工機械など）の製造に至るまで、多様な産業の集積と産業相互の連携が存在する点などが同地域の特徴として取り上げられてきた。同時にまた、この地域は、イタリアの他の地域と比較して若年者の失業率が低率であることでも知られている。

卒業生の動向：イタリアの職業高校はいずれも、いわゆる進路指導、就職指導をほとんど行わず、学校側も卒業生の進路・就職状況を把握していない。

2. 対象者の生活価値と学校に対する 考え方及び仕事観と職業志向

〔1〕対象者の基本属性—父母職業、父母学歴
対象者の父母職業（本文末表①—以下図表につ

いては本文末を参照）について言えば、父親の場合、(1)総じて中小企業従業者が多く、とりわけA、C校においては生産部門への就業率が高い、(2)B校（高専）生の父親は経営的立場（自営業、企業経営、独立専門職）に携わる傾向が強く、この点でイタリアの数値とほぼ並ぶ、などの特徴が挙げられる。母親の場合は、(1)B、C校においてパート、内職への従業率が多いのに対し、A校では同従業率が他校の1/3と少なく、替わって中小企業生産部門へのフルタイム就業が2割を占めている。(2)イタリアでは、フルタイムでの就業か、家事専業かの二極分解が著しい、といった傾向が確認できよう。

最終学歴（表②）については、日本の場合、特にA、C校において回答不明が4割近くを占めるため、比較作業が困難だが、(1)総じて、父親の場合、普通高校よりも職業高校卒業者が多い、(2)B校においては、父母とも大学・大学院修了者が多い、また(3)イタリアにおいては、父親の6割、母親の8割が義務教育を最終学歴としている点などが特徴として挙げられる。

職業—学歴の関連についていえば、例えば、B校における学歴の高さと、同校生徒の父親の大企業従業率の高さとの関連が想定されるものの、全体的としては顕著な結びつきが見だしにくい。

それでは、こうした属性をもった父母のもとで工業高校生、高専生が、彼らの家族とどのような関係を取り結んでいるかについて検討しよう。

〔2〕家族・家庭に対する考え方

地域及び国を問わず、母との親和性が強く（表③）、「相談相手」の選択で見ると、母親に対する信頼度が際だつ（表④）。

また、家族のメンバーの人柄をどう評価しているかについては地域を問わず同様の傾向が確認された（表⑤）。父親は、「家族第一」を優位としつつ「仕事」も尊重し、「正直」かつ「頼りになる」存在として見なされる。母親については、例外なく、まず「家族第一」であり、父親同様「正直」かつ「頼りになる」との評価が続く。「自分」に対する評価となると、「楽観的」かつ「理想を求めるといった自己イメージを抱く。

イタリアの場合、父親像は日本と類似するが、

母親の「家族第一」像がより徹底し、それと連動してか母親が「自己犠牲的」に映ずることが見てとれる。

次にこのような比較的安定した家族関係の中で、彼らが両親からどのような生活価値及び仕事に対する考え方を学んだかについて見てみよう。

〔3〕生活価値

表⑥は、「生きる姿勢」をめぐって、両親から何を学んだかを示したものである。「義務を果たす」は、国、地域、父母を問わずほぼ筆頭に挙げられている。その上で、父親からは「自分を向上させる」ことを学んでいるのに対し、母親からは「幸福追求」「自分の利益擁護」「現状に満足」といった自己防衛的な生活価値を学んだとしている点が、父母間の違いとなっている。すなわち父からは「自己革新」の価値を、母からは「自己肯定」の価値を摂取しているといえよう。

また、「仕事への姿勢」を示す表⑦からは、父親から学んだこととして「働くためにだけ生きるのではない」が、また母親から学んだこととして「好きな仕事をやるのが大切」が圧倒的優位を占め、他の回答群「給料が多い」「自己実現」「仲間づくり」「社会貢献」などは仕事の選択基準として後退している。〔仕事中心〕と称される日本の労働者の生活とはうらはらに、父母の意識の中には〔仕事の相対化〕への志向が強く作用している。

次いで彼らの生活価値を序列化した表⑧を見よう。日本の三校においては、いずれも「友情」「家族」「愛情」「自由時間」の重視が際立ち、「仕事」は後景に退く。これに対しイタリアでは「仕事」も90%代に食い込み、「家族」「愛情」と比肩しうる位置づけを得ている。また「鍛錬」や「研究」といった研鑽的行為に対する位置づけも、日本では4割～6割代なのに対して、イタリアでは7割代と若干高くなっている。

これらから想定されることは、日本の工業校生の場合(1)義務遂行の意識は強いものの、(2)何を自分の義務と見定めるかについての認識は薄く、(3)仕事の位置づけを絶対とはせず、(4)自分の嗜好や自由時間を大事にしながら、(5)家族の幸福ないしは安定をはかっていく、そうした生活価値の形成である。

それでは、比較的安定的な家族関係の中で、上記のような生活価値を得てきた彼らは、学校に対していかなる見方をしているのか。

〔4〕学校生活をめぐる意識

〔3〕で私たちは、家族生活において形成される価値が、「仕事」を相対化する傾向を持つことを見てきた。次に学校生活をめぐる対象者の意識を考察しながら、家族生活と学校生活との両者によって規定される彼らの生活価値、仕事に対する考え方を探っていこう。

まず、彼らが現在の学校を選択した理由に着目しよう。回答群を「積極的理由」「消極的理由」「外在的理由」の三つに分け、回答総数を100とした時の割合を示したのが表⑩である。日本の三校においては、総回答数のうち半数以上が、「積極的理由」に属するものとなっているものの、イタリアは、これをさらに上回り、7割強が「積極的理由」を示し、「消極的理由」は6%にすぎない。これに対し、日本では高専をのぞいて2割近くが「消極的理由」となっている。

次に、4割近くが「外在的理由」「消極的理由」によって占められる入学動機のもとで入学後、彼らは学校生活に対してどう感じているのかを見よう。

表⑪「現在の学校を選択したことに対する満足度」がいわば総合判断、表⑫「学校生活の満足度」が個別的な局面における満足度を示す。総合判断では、日本の場合3～4割が満足を示すのに対し、イタリアでは満足層が9割にのぼる。また、C校はじめ「どちらともいえない」として判断を保留する層が3～6割にのぼる点も日本側の特徴である。2つの表からは、総合的な満足度の高さが個々の局面の満足度に反映されていることが見てとれるが、「専門科目の実験や実習」「友人との関係」においては、日本側でも比較的高い満足度が示される。

〔5〕「何を学んだか」についての自己認識

それでは、実際彼らは何を学んだと考えているのだろうか(表⑬)。小林氏の分類(小林甫「職能短大生の生活価値志向」(科学研究費報告書)、1996年)に従って、回答群を「狭義の工業教育」「広義の工業教育」「道徳・社会性」「価値観」の4つに分

類して傾向を見てみよう。日本の場合「狭義の工業教育」を学んだと認識する者が多いのに対し、イタリアでは、「広義の工業教育」「道徳・社会性」を学んだと認識する者の率が高くなっている。

彼らが、現在自分にはどういった能力があると考え（自己認識）、近い将来、自分がどのように成長したいかと思っているか（目標のイメージ）を問うた表⑭⑮に目を転じよう。

仕事内容を「製造」「管理・設計」「開発」の三群にわけ（注1）、現在の自分の位置と将来の目標とを比較すると次のような特徴が浮上する。第一に、現在の自分の能力についてだが、日本の場合、工業高校で「製造」が「管理・設計」を3—5割上回り、B校（高専）では逆に「管理・設計」が「製造」を3割弱上回る。イタリアでは、「製造」が「管理・設計」の約2倍となっている。第二に、これが将来（5—6年後）の能力となると、B校において「開発」が倍増する他は、A校、C校において「無回答」とするものが3—4割弱におよび、将来の目標や自己イメージを描き得ないものが多くなる。これに対し、イタリアでは、「製造」が3割減、「設計・管理」が6割増、また無回答も7%代にとどまり、近い将来にむけての自己イメージが比較的明瞭に打ち出されている。

前述の「広義の工業教育」の濃淡が、将来の自己イメージ形成の有無とも呼応するものであることが読みとれよう。

〔6〕「仲間志向」の高さ

しかしその一方で、「学校に対する見方」を示した表⑯によれば、日本においても、半数近くの生徒が、「人生の目的を探す場」「仲間と高めあう場」として学校を捉えている。とりわけ、高専B校では、表⑯同様、他のA、C二校と比較してイタリアに類似した傾向を示し、8割が学校を「仲間と高め合う場」とする。

仲間志向の高さは、調査項目随所で観察されており、一見彼らの安定的友人関係を想定させる。が、他方、生活実態のデータをみると、日本の場合、日曜日などは友人と過ごすというよりも在宅型が多く、一人で楽しむ場合が多いことがうかがえる。彼らの「仲間志向」は、深い関わりをもって共に行動するといった人間関係を前提とするの

ではなく、傷つけあわない程度に距離を保った上でのものとも言えまいか。ことあるごとに「仲間志向」が確認できるということは、そこに良好な仲間関係が存在しているというよりも、むしろ彼らにとって焦眉の問題、最も心をくだく問題として「仲間」が存在していることを意味する。

希望としての「仲間志向」が、実態としての「孤立傾向」と表裏一体のものである可能性も含めて、この「仲間志向」の高さを捉えるべきであろう。

〔7〕学歴社会に対する抵抗感

これまでのところで、必ずしも「積極的理由」で入学したわけではない日本の工業高校生でも、カリキュラムとして用意された「狭義の工業教育」とともに、人間形成に関わる学びを意識していることが示され、比較的「学校世界」に親和的価値を有していることがうかがえる。

しかしその一方、彼らが学校の提起する価値観に猛然と反発を示す場面も存在する。すなわち学歴社会に対する強固な嫌悪である。概して何ごとにおいても強い否定を回避する彼らの回答群の中で、この項目に限っては、激しい抗議のメッセージが読みとれる。表⑰は、いわゆる「学歴社会」に対する彼らの評価（『いい学校』に入れば『いい会社』に入社でき、その結果『いい生活』を送ることができる』という考え方がありますが、あなたはこれをどう思いますか？）を問うたものである。「積極的同感層」「消極的同感層」「批判層」の3つに分類して傾向を見ると、日本側3校とも批判層の割合は類似している（なお、イタリア側共同研究者は、そもそもこうした考え方がイタリア社会に存在しないため、質問項目として採用していない）。

また、たとえ、積極的同感を示した者についても、表⑰からその理由づけを見ると「価値＝そうあるべきだ」という当為」として強く同感している者は極めて少なく（「努力の証」「それなりに勉強する」の2例にすぎない）、大部分は「現状追認＝実際そうになっているから仕方がない」といった意味あいでの同感であることが読みとれる。さらに批判層の場合、次の三種に大別できよう。

第一に「学歴」とは対抗的な価値——「人間力」

「人柄」「本来の能力」「個性の発揮」「やりたいことを成就」「良好な人間関係」「資格」——を主張するものである。

第二に、「いい」ということの内実を問うたり、その多元性を主張するもの。特に「いい学校」については比較的暗黙の了解——偏差値、進学率、大手への就職率など——を前提としているものの、「いい会社」「いい生活」となると、一元的な捉え方に対する疑義が目立ち、例えば「いい会社」は「給料が多い」に限らず、「やりたいことができる」「良好な人間関係」「個性を発揮できる」など、多様な価値への展開をみせる。彼らの主張によれば、「いい会社」「いい生活」には、「その人にとって」の基準が存するはずだという。給料の多寡や会社の規模など、一元的な基準で「良し悪し」が決まるのではないとする考え方は、回答者の実に多くが共有する。特徴的なのは、「いい学校」については同種の議論が展開されていない点である。すなわち「いい会社」「いい生活」を相対化する視点や想像力を持った生徒が、「いい学校」に対しては相対化を試みていない。「生活」や「仕事」については自らの生活体験の中から、その多様性を描くことができるのに対し、「学校」についてはオルタナティブなイメージが形成されていないのである。

そして第三に、「学歴社会」に対する理屈抜きの大きな反発、つまりありうべからざる姿として、半ば憤りをもって「同感せず」を表明するものも少なくない。

〔8〕 雇用労働に対する考え方

調査対象者の通う学校は、いずれも中小企業の高度集積地に位置するが、そのことが、彼らの中小企業観や仕事に対する考え方にどのような影響を及ぼしているのか。ここでは日伊が好対照を成している点に着目して、日本の特質を確認していきたい。

イタリアの場合、「雇用の安定度」「昇進機会」「労使関係」「技術習得」の面で、中小企業が認知を得ているのに対し、日本では、いずれの項目においてもその認知度はイタリアの1/2～1/3に留まる(表⑱)。イタリアにおける中小企業のイメージと日本のそれとの相違が確認できよう。

しかしそのことは、必ずしもイタリアの若者にとって「中小企業で働く」根拠となるわけではない。卒業後の就職希望についての問いから見ると(表⑲)、まず日本の場合、「中小企業」か「大企業」の選択では、A校が両者ほぼ拮抗、高専B校では大企業が上回り、C校では中小企業への就職希望が大企業のそれを倍近く上回る。それに対してイタリアは、大企業、中小企業いずれにせよ、1割前後の生徒によって希望されているにすぎない。むしろ彼らは中小企業を「起業」することに重点をおいている。表⑳にも示されているように、当初から「雇われて働く」よりも自ら経営者となることを望む傾向が強い。

〔9〕 仕事の価値に対する判断基準

就職先の選定基準について見てみると、「給料がいい」「自分の能力が発揮される」の二項目が、日本、イタリア問わず上位三者のうち二つを占める(表㉑)。

一方、給料の多寡を決める判断基準となると、日本とイタリアで若干のズレが生じる(表㉒)。日本の場合、最多となった選択肢は「あなたより熟練と経験のある人」で共通。これに続いて「あなたより責任を負っている人」「きつい、苦勞する仕事の人」。そして三番手に「会社に利益をもたらした人」「研究開発に業績のあった人」が来る。こうした順序づけからすると、営業成績や開発実績などの「結果を出す能力」への評価に先行して、むしろ現在リストラ攻勢の中で苦渋を強いられている「熟練・経験者」「中間管理者」「現業部門の労働者」についてこそ厚遇を求める結果となっている。

これに対し、イタリアは、回答方法が異なるため安易な比較はできないものの、「熟練」や「経験」への評価は少なく、「会社に利益をもたらした人」が最多。おそらくは、イタリア側回答者の、経営者志向の強さと関連した相違かと考えられる。

3. 小括一対象者の「学校」観、「仲間」観、「仕事」観をめぐる論点

本節では、前節でおこなったアンケートの集計分析に基づいて、対象となった工業高校生、高専生が、どのような仕事観、職業教育観を有してい

るのかをまとめてみよう。

これまで見たように、いわゆる「全国的な平均像」を析出するには、地域間、学校間、その他の諸条件による偏差が大きい。地域によって産業構造、求められる人材、産業の主たる担い手、地域産業の主導権のあり様、労働力の需給関係が異なるに加え、学校ごとにも、教育上の特色、種別（工業校、普通校の工業コース、高専）、進路指導の方針などの異なりがある。そのため、各質問で浮き上がってきた彼らの職業観、仕事観を、その背景に立ち入って理解するには、多くの要因と格闘しなければならない。

今回の調査は、冒頭述べたように国際比較を念頭においたものであるため、国内の地域間の相違よりも、むしろ「中小企業の高度集積地」という共通性に注目して、イタリアとの比較において、現代日本の工業高校生、工業高専生の仕事観とその背景にある生活価値の特徴づけを試みてきた。

本節ではその概略を振り返りながら、本調査の意味付けと残された課題に言及したい。

安定的な家族観

回答者は圧倒的に男子学生であるが、いずれも「母親」との親和性が強固である。「義務の遂行」や「研鑽・向上」「仕事の成就」といった価値観を父親から継承する一方で、実際の行動面では、母親が提示していると彼らが解釈するところの「自己防衛的価値」に規定されるところが大きい。家庭に寄せる絶対の信頼と自己防衛を基盤とする彼らの「生活価値」は、そこに抱かれて「楽観的に」「理想を探究」する自己イメージを支える。探究は、本来「自己革新」や「自己の崩壊」を伴う行為だが、自己に対する危機意識は巧みに回避されている。

学校に対する消極性と満足感の混在

家庭・家族に対するでの調和的意識の延長に、学校生活に対する高い満足度が存在する。＜「高卒資格の取得」が主たる進学動機である場合、卒業さえできれば目的は達成される。それ以上の期待のなさが高満足度となってあらわれるのだ＞といった考え方もできよう。しかし、前節でも見たように、個々の局面——とりわけ、専門科目での

座学、実習、教員との関係（「面倒見のよさ」、「将来を考えてくれる」など）、友人との関係——における満足度の高さを見ると、一概に、無関心故の満足とは言えないものがある。

一方、イタリアの場合、進学理由として「積極的動機」が優勢となっており、その後の学校生活についても、高い満足度を示している。言い換えれば、高い期待をもって進学をし、ほぼその期待に反することのない学校生活を送っていると言えよう。その満足は、必ずしも高度な学習内容や専門性に限られるものではなく、教員や友人との関係など教科外の局面においても日本と比較して満足度が高い。

進路指導や就職指導などもなく、部活、生徒会活動もない中で、日本と比べて希薄であることが予想されるイタリアの学校の人間関係に、かくも高い満足度が見いだされる根拠が何か、本調査からは定かとならなかった。

「学歴社会」に対する反感とその背景

さて、家族生活においても学校生活においても矛盾をさほど意識しない彼らが、憤然と批判するのが「いい学校→いい会社→いい生活」図式である。アンケートを通じて唯一、彼らが闘争心を露にしたのが「学歴」優先の社会の仕組みに対してであった。

「学歴」に対して彼らが打ち出す対抗価値は、前項でも示したように、「人柄」「人間力」「本来の能力」「個性」「努力」「(職業的な)資格」「良好な人間関係」「本来の能力」などである。むろん、それぞれの対抗価値が、どのように「学歴」を乗り越えるのかは未だ描き得ない。けれども、彼らの記述からは、「学歴」決定論に何とか反駁したいとする気迫が伝わってくる。

理由付けの記述に示された「今、自分がいい学校にいるとは思わないから」という答えに象徴されるように、この図式を認めてしまうと、自ら自分の将来を否定しなくてはならなくなる。そうした危機感と、レゾンドートルを守ろうとする切迫感が、強固な否定の言葉をうながしたと見ることができよう。

しかし、彼らの示す反発の背景は上記にとどまるものではない。ものづくりを学ぶ彼らのキャリ

アが影響しての、独特の考え方もその背景の一つとなっている。

例えば表⑦で見た理由付けの分析からは、彼らが「会社」と「仕事」を峻別していることがうかがえる。「いい会社」に入ったからといって「やりたい仕事」が保障されるとは限らない点を危惧する意見が散見される。このように、「仕事」を会社に従属するものとは捉えず、独立した領域とみなす傾向は、製造現場に近い部分で学ぶことと関わるというのが筆者の想定である。すなわち、事務的な仕事、間接部門労働は、会社ごとのやり方が貫徹し、別の職場との普遍性が少ないのに対して、直接労働は、例えば「渡り職人」が成立するような普遍性を有している。その普遍性を無意識にせよ察知した上で、「仕事」と「会社」との間に区分を設定しているのではないか。「仕事」を相対化する視点については、前述したが、同時に彼らは「会社」をも相対化する視点を有している。

よりよく働くことへの欲求

日本であれ、イタリアであれ、彼らは「仕事」を絶対的な価値とはみなさない。「仕事」を人生の中に位置づける際は、「仕事も大切なことの一つではあるが、他にも大切なことがある」「仕事の他にもっと大切なことがある」とする選択肢に、7-9割が集中している。しかし、同時に「職場生活の意味」(表⑧)では、「生計を立てること以外、特に意義はない」とする回答者は平均4.4%に過ぎない。「仲間」との関係性を求め、「仕事に打ち込み」ながら「自らの技術を向上させる」ような空間として、いわばきわめて積極的な観点から「職場」を捉える姿も見られる。

「仕事人間」を回避しながらも、単に給料目的にとどまらず「仲間」「技術」をキーワードによりよく働きたいとするアンビバレントな意識が確認されよう。

このことは、彼らの中小企業観によっても読みとれる。いずれの対象校とも、中小企業集積地に存するが、「中小企業で働きたい」「職人として働きたい」「中小企業を独立開業したい」「家業を担

いたい」とする回答者をあわせると、「大企業で働きたい」とする回答者を1割ほど上回る。しかしかといって、彼らは中小企業で働くことを美化しているわけではない。「雇用の安定度」「労使関係」などの項目においては、日本の場合、楽観的評価よりも悲観的評価の方が上回っており、イタリアの工業高校生の評価とは異なる傾向も見える。

逆に日本で中小企業に対する楽観的評価が優勢となるのは、「昇進機会」及び「質の高い技術が身につく」といった項目においてである。「就職先を探す時の基準」と考えあわせると、労働条件や安定性もさることながら、「自己の能力の陶冶」と「それを発揮できる環境」が重要な選択基準を構成しているとはいえないか。「昇進機会」も他人より上に立つことが目的のではなく、むしろ、自己の裁量範囲を拡大していく手段として位置づけているといえよう。

また、「給料の多寡を決める基準」からは、「能力主義」や「業績主義」へのわずかな抵抗も見られ、「学歴変偏重」否定と呼応する判断が示されている。

総合すれば、日本の工業高校生、高専生にとって、自分の技術や能力を磨きつつ、仲間とのよき関係を取り結び、熟練や経験に応じた評価を受け取ることのできる空間が、「いい職場」像として浮上する。むろんストレートに問えば、依然「大企業」や安定的雇用労働がその目標としてかけられる傾向になろうが、潜在的には上記のような仕事場への渴望が読みとれよう。

問題は、そうした当初のイメージが、進路指導を経て、どのような修正を遂げていくのか、その結果彼らはどういった最終選択を受け入れるのかであろう。今回は彼らの原初的な仕事観を描くに留めざるを得ないが、しかしその原初イメージの中に、私たちは、幾分かの挑戦的含意——就職といえばすなわち「就社」を意味し、毎年同じような人気企業に就職希望が殺到するような「就職文化」に抗するような意識——を読みとれることができるのではないかと。

【表① 父母の職業】

単位：％

職業カテゴリー	父 親 の 職 業				母 親 の 職 業			
	A 校	B 校	C 校	イタリア	A 校	B 校	C 校	イタリア
中小企業労働者	32.3	33.3	27.7	} 39.2	19.9	9.8	6.5	30.7
大企業労働者	9.1	14.0	11.8		0.0	3.3	2.6	
公務員・教員など	4.6	6.5	5.3	17.3	3.1	2.2	2.6	9.3
農業など	0.0	0.0	0.0	3.9	1.5	0.0	—	2.0
自営業・家族従業	4.6	14.0	9.2	21.0	1.5	8.6	5.2	8.4
企業経営・独立専門	7.7	16.2	7.9	10.3	3.0	3.3	2.6	1.4
パート・内職	—	—	—	—	13.8	37.6	32.9	—
家事専業	—	—	—	0.8	6.2	24.8	14.5	45.9
その他	3.1	2.2	9.2	8.1	6.2	2.2	5.3	0.3
不明／わからない	6.2	—	28.9	1.4	44.6	8.6	27.6	2.0

【表② 父母の最終学歴】

単位：％

学歴カテゴリー	父 親 の 学 歴				母 親 の 学 歴			
	A 校	B 校	C 校	イタリア	A 校	B 校	C 校	イタリア
義務教育まで終了	16.9	12.9	15.8	62.3	6.2	11.8	14.5	75.4
普通高校卒業	18.5	11.8	14.5	10.4	26.2	38.7	31.6	7.8
職業高校卒業	13.8	25.9	25.0	26.1	10.8	6.5	9.2	14.0
専修・各種学校卒業	—	4.3	1.3	—	4.6	1.1	—	—
高等専門学校卒業	3.1	—	1.3	—	3.1	1.1	2.6	—
短期大学卒業	1.5	—	—	—	1.5	7.6	5.3	—
大学・大学院卒業	3.0	19.5	3.9	0.8	1.5	5.4	2.6	—
他・不明・無回答	43.1	25.8	38.1	1.7	46.1	28.0	34.3	2.8

【表③ 父母との関係】

単位：％

関係カテゴリー	父 親 と の 関 係			母 親 と の 関 係			父 母 と の 関 係
	A 校	B 校	C 校	A 校	B 校	C 校	イタリア
良 好＋穏 や か	63.1	62.3	73.7	67.7	80.7	80.3	85.7
無 関 心＋深 刻	18.4	18.3	18.4	13.8	4.4	13.2	13.8

「良 好」＝深いところで理解しあっていて良い関係だ

「穏やか」＝ぶつからないよう努力しあい穏やかな関係だ

「無関心」＝それぞれが自分のことを考えていて無関心だ

「深 刻」＝大切な問題でぶつかっていて深刻な関係だ

【表④ 相談相手】複数回答

上位3位まで(単位:%)

	A 校	B 校	C 校	イタリア
第1位	同じ学校の友人 52.3	同じ学校の友人 58.1	同じ学校の友人 44.7	母親 18.2
第2位	母親 32.3	母親 36.6	母親 32.9	友達 14.8
第3位	父親 21.5	別の学校の友人 30.1	別の学校の友人 27.6	父親 10.6

イタリアの質問票ではテーマ別相談相手を問うているため、平均値で算出

【表⑤ 家族—父親・母親・自分のイメージ】

(複数回答第3位まで 単位:%)

	A 校	B 校	C 校	イタリア
父	第1位 家族第一 36.0	第1位 家族第一 26.9	頼れる 42.1	正直 51.2
	第2位 正直 14.0	頼れる 25.8	家族第一 27.6	家族第一 39.2
	第3位 仕事第一 12.0	仕事第一 20.4	仕事第一 22.4	仕事第一 35.6
母	第1位 家族第一 35.0	第1位 家族第一 38.7	家族第一 39.5	家族第一 65.3
	第2位 正直 17.0	頼れる 23.7	頼れる 40.9	正直 37.4
	第3位 楽観的 17.0	正直 19.4	自己犠牲 19.7	自己犠牲 26.6
自分	第1位 楽観的 25.0	正直 32.3	理想探究 32.9	家族第一 30.5
	第2位 理想探究 25.0	楽観的 31.9	楽観的 30.3	正直 27.2
	第3位 正直 22.0	理想探究 24.7	正直 22.4	自信家 25.7

【表⑥ 両親から学んだ人生への姿勢】

(複数回答 第2位まで) 単位:%

	A 校	B 校	C 校	イタリア
父	第1位 自分の義務を果たす 20.0	自分の義務を果たす 35.5	自分の義務を果たす 36.8	自分の義務を果たす 56.0
	第2位 自分を向上させる 13.8	自分を向上させる 32.3	家族尊重 18.4 幸福追求 18.4	自分を向上させる 33.9
母	第1位 自分の義務を果たす 20.0	自分の義務を果たす 32.3	幸福を求める 26.3	自分の義務を果たす 40.9
	第2位 自分の利益を守る 16.9	誰も傷つけない 23.7	自分の義務を果たす 18.4	今の自分に満足する 31.1

【表⑦ 両親から学んだ仕事への姿勢】

(複数回答 20%以上のもの第2位まで) 単位:%

	A 校	B 校	C 校	イタリア
父	第1位 好きな仕事をやるのが大切 30.8	働く為にだけ生きるのではない 40.9	働く為にだけ生きるのではない 42.1	働く為にだけ生きるのではない 44.8
	第2位 —	好きな仕事をやるのが大切 40.9	好きな仕事をやるのが大切 40.8	好きな仕事をやるのが大切 41.4
母	第1位 好きな仕事をやるのが大切 29.2	好きな仕事をやるのが大切 35.5	好きな仕事をやるのが大切 35.5	好きな仕事をやるのが大切 47.4
	第2位 —	働く為にだけ生きるのではない 30.1	働く為にだけ生きるのではない 30.1	働く為にだけ生きるのではない 41.2

【表⑧ 大切にしたいと思うこと】

単位：％

	A 校	B 校	C 校	イ タ リ ア
80%以上	友 情 95.4	自由時間 93.2	家 族 85.5	友 情 98.0
	家 族 90.8	友 情 92.5	愛 情 82.8	自由時間 97.0
	愛 情 90.8	愛 情 91.4	友 情 82.6	家 族 93.3
	自由時間 88.8	家 族 90.3	自由時間 82.1	仕 事 91.6
	自 分 80.0		仕 事 80.2	愛 情 82.8
50%以上	仕 事 73.9	仕 事 76.3	身体鍛錬 67.1	身体鍛錬 74.2
	身体鍛錬 73.9	自 分 71.0	社会義務 59.2	研究文化 73.3
	社会義務 73.9	身体鍛錬 65.6	自 分 52.6	自 分 61.9
	研究文化 53.9	研究文化 65.6		
	社会義務 63.4	他民族尊 62.4		
	愛 郷 心 35.4	愛 郷 心 37.7	研究文化 47.3	社会義務 47.3
	政治活動 24.6	政治活動 16.2	他民族尊 39.2	宗教義務 37.5
	宗教義務 17.0	宗教義務 10.8	愛 郷 心 31.6	
			政治活動 18.5	
			宗教義務 7.8	

それぞれの項目について、「とても大切」「かなり大切」「少し大切」「大切でない」を選択。
上記表の数値は「とても大切」+「かなり大切」の計をパーセンテージ化したもの。

【表⑨ 義務教育以降の進学理由】（一部）（複数回答）

単位：％

	A 校	B 校	C 校	イ タ リ ア
興味持って打ち込める仕事を探す為	32.3	41.9	27.6	60.2
収入のより多い仕事に就く為	16.9	10.8	5.3	31.1
勉強や研究が好き	0.0	8.6	2.6	8.7
多くの知識を得る為	21.5	41.9	21.1	65.5
高卒の資格がほしい為	40.0	16.1	32.9	x
仕事上の資格がほしい為	27.7	11.8	7.9	x
親の期待/プレッシャー	15.4	9.7	5.3	9.5

【表⑩ 現在の学校を選択した理由】（複数回答）

単位：％

	A 校	B 校	C 校	イ タ リ ア	
積 極 的 理 由	いい仕事につくため/家業発展	11.8	22.4	18.2	18.0
	学科に興味があった	29.4	24.9	21.4	19.7
	多くの知識を得たい	13.4	14.1	8.2	15.2
	小 計	54.6	61.4	47.8	71.5
消 極 的 理 由	他に行けなかった	50.6	1.7	2.5	0.1
	入学が易しかった	8.4	5.4	8.8	3.8
	どこでもよかった	7.6	5.0	6.3	2.0
	小 計	21.0	12.1	17.6	5.9
外 在 的 理 由	中学校の先生の勧め	5.0	5.4	8.8	8.6
	親 の 勧 め	4.2	8.7	3.1	8.0
	家 から 近 い	11.8	7.9	14.5	3.0
	小 計	21.0	22.0	26.4	19.6

【表① 現在の学校を選択したことに対する満足度】

単位：%

	A 校	B 校	C 校	イタリヤ
満足している	30.8	44.1	26.3	87.1
満足していない	33.8	21.5	6.6	12.6*
どちらともいえず	33.8	33.3	67.1	0.0
無回答	1.5	1.1	0.0	0.3

* イタリヤの「満足していない」は「他の学校に行きたい」(9.5)、「他のことをしたい」(2.0)、「すぐ働きたい」(1.1)を意味する。

【表② 学校生活の満足度】

単位：%

	A 校	B 校	C 校	イタリヤ
普通科目／一般科目の授業	13.8	18.3	23.7	x
専門科目の教室での授業	35.4	33.4	35.5	61.3
専門科目の実験や実習	50.8	44.1	46.1	57.1
先生との関係	33.8	45.2	38.1	67.5
クラスの友人との関係	67.7	85.8	55.3	90.2
部活の友人との関係	47.7	45.4	48.7	x 部活無し
学校の施設・設備	20.0	21.5	17.1	57.4

* それぞれの項目について示された回答群（「とても満足」「かなり満足」「少し満足」「満足していない」のうち、「とても満足」「かなり満足」を合計した積極的満足層を上記の数値とした。

【表③ 現在の学校で学んだこと】(複数回答)

単位：%

		A 校	B 校	C 校	イタリヤ
工業教育の狭義	職業的・専門的能力	73.8	83.9	81.6	69.2
	仕事に対する考え方	16.9	19.4	35.5	x
	小計	90.7	103.3	117.1	69.2
工業教育の広義	一般的教養・考え方	21.5	16.1	27.6	87.1
	勉強の方法・研究法	6.2	39.8	5.3	60.5
	小計	27.7	45.9	32.9	147.6
道徳教育の社会性	他人の中での行動	6.2	29.0	9.2	70.9
	言葉使いや礼儀作法	13.8	18.3	11.8	x
	小計	20.0	37.0	21.0	70.9
人生観の価値観	社会に対する考え方	16.9	18.3	22.4	x
	人生の生き方	12.3	12.9	10.5	x
	小計	29.2	31.2	32.9	x

【表⑭ 来春入社後、どんな仕事ならできると思うかー日本】（複数回答）

単位：%

		A 校	B 校	C 校
製 造	自らの手で製品の加工、製造	35.4	35.5	50.0
	工作機械で製品の加工、製造	44.6	40.9	51.7
	小さなトラブルに対処・改善	18.5	40.9	25.0
	小 計	98.5	117.3	127.0
管 理 ・ 設 計	作業工程の保守管理・改善	1.5	26.9	5.3
	生産工程トラブルに作業手順等変更で対処	6.2	9.7	7.9
	生産工程全体のトラブルに設計技術者共同で対処	23.1	18.3	7.9
	品質管理・工程管理	7.7	20.4	7.9
	生産計画の設定、人員配置	3.1	12.9	9.2
	効率的生産のために設計変更	4.6	19.4	14.5
	設計製図の作成	12.3	25.8	30.0
	新製品の図面を仕様どおり書き上	4.6	7.5	7.9
	理論的な計算による製品設計	4.6	19.4	17.1
小 計	67.8	160.3	107.7	
開 発	新製品の開発、特許や実用新案	4.6	7.5	7.9
	工学の基礎理論研究、論文発表	1.5	3.2	2.6
	小 計	6.1	10.7	10.5
無 回 答 ・ 不 明		27.7	8.6	11.8

【表⑭' 来春入社後、どんな仕事ならできると思うかーイタリア】

（複数回答）

単位：%

		イ タ リ ア
製 造	上司の指示での作業	54.1
	設計図に基づく作業	75.4
	製品欠陥の発見改善	61.9
	小 計	191.4
管 理 ・ 設 計	欠陥減少への設備改善	33.6
	効率増大へ設備改善	38.4
	部課内での生産管理	19.0
	工場内での生産管理	7.3
	新製品原型の現実化	34.5
	新製品の生産工程化	24.9
小 計	157.7	
開 発	顧客要求の新製品化	41.7
	新製品の考案と研究	27.5
	小 計	69.2

【表⑮ 5—6年後、できるようになっていたい仕事—日本】(複数回答)

単位：%

		A 校	B 校	C 校
製 造	自らの手で製品の加工、製造	12.3	17.1	7.5
	工作機械で製品の加工、製造	18.5	2.2	10.5
	小さなトラブルに対処・改善	3.1	5.4	3.9
	小 計	33.9	24.7	21.9
管 理 ・ 設 計	作業工程の保守管理・改善	1.5	8.6	2.6
	生産工程トラブルに作業手順等変更で対処	1.5	4.3	0.0
	生産工程全体のトラブルに設計技術者共同で対処	7.7	5.4	1.3
	品質管理・工程管理	4.6	5.4	2.1
	生産計画の設定、人員配置	1.5	5.4	1.3
	効率的生産のために設計変更	3.1	3.2	0.0
	設計製図の作成	3.1	15.1	21.1
	新製品の図面を仕様どおり書き上	0.0	2.2	3.9
	理論的な計算による製品設計	1.5	4.3	3.9
小 計	24.5	53.9	34.1	
開 発	新製品の開発、特許や実用新案	3.1	11.8	0.0
	工学の基礎理論研究、論文発表	1.5	9.7	2.6
	小 計	4.6	21.5	2.6
無 回 答 ・ 不 明		36.6	9.7	28.9

【表⑯' 5—6年後、できるようになっていたい仕事—イタリア】

(複数回答)

単位：%

		イ タ リ ア
製 造	上司の指示での作業	53.8
	設計図に基づく作業	39.5
	製品欠陥の発見改善	44.5
	小 計	137.8
管 理 ・ 設 計	欠陥減少への設備改善	45.4
	効率増大へ設備改善	41.2
	部課内での生産管理	51.3
	工場内での生産管理	38.9
	新製品原型の現実化	39.2
	新製品の生産工程化	34.2
小 計	250.2	
開 発	顧客要求の新製品化	40.1
	新製品の発見と研究	34.5
	小 計	74.6

【表⑩ 学校という場に対する見方】

単位：%

		A 校	B 校	C 校	イタリア
業広 教の 育工	よい仕事を見つけるのに役立つ	33.8	29.0	47.4	89.0
	学ぶ意欲ある者に多くを与える	41.6	59.1	44.7	84.6
道社 徳会 教 育性	規律遵守の大切さを教える	30.8	20.4	30.3	x
	若者が仲間を見いだし高め合う	55.4	77.4	43.4	87.4
	社会生活や政治への参加の仕方を教える	26.9	8.6	14.5	68.0
人価 生値 観観	人生の目的探しに役立つ	44.6	47.3	46.0	x

* 回答群「とても同感」「かなり同感」「少し同感」「同感しない」のうち、「とても同感」+「かなり同感」を合計した「積極的同感層」を上記の数値とした。

【表⑪ [いい学校→いい会社→いい生活] という考え方に対する評価】

単位：%

	A 校	B 校	C 校
とても同感+かなり同感	10.8	23.7	32.9
少し同感	29.2	20.4	22.4
同感できない	52.3	54.8	42.1
無回答	7.7	1.1	2.6

【表⑫ 中小企業への評価】

単位：%

	A 校	B 校	C 校	イタリア
中小企業での仕事は雇用が安定	15.3	17.2	14.4	30.4
中小企業の方が昇進の機会豊富	23.1	45.3	32.9	65.8
中小企業の方が労使関係が良好	15.3	25.8	26.3	75.6
中小企業の方が高質な技術が身に付く	24.6	39.8	21.0	76.5

【表①】『いい学校→いい会社→いい生活』に対する考え方の理由付け

A	校	B	校
○「とても同感」とする回答者の理由			
<ul style="list-style-type: none"> • それだけ努力をした結果なので (S-8) • (それだけのことを) やってきたのだから当然 (S-26) 		<ul style="list-style-type: none"> • 日本の現状が実際そうっており、誰もそれをただそうとはしないから (S-23) • 実際にそういう社会だから (S-82) (S-93) 	
○「かなり同感」とする回答者の理由			
<ul style="list-style-type: none"> • 努力した分だけ後で楽ができるのは当たり前 (S-41) • いい学校に入って資格をとって卒業すればいい会社に入っていい生活が送れるが、最終的には自分の仕事に対する意欲ではないかと思う (S-57) 		<ul style="list-style-type: none"> • 個人の人の柄や実力も大事だが、今の日本はそれを評価する仕組みになっていない (S-4) • 「いい学校」に入っているということは、努力したことの証だから (S-4) • 会社が「いい学校」からしか採用しないから (S-5) • 実際にそうになっているから (S-14) (S-22) (S-50) (S-52) • 現状では、学校だけでレベルづけされ、その時点で「いい会社」や「いい生活」からは切られてしまう (S-15) • 日本ではそういう流れになっているので、自分だけ抵抗しても無駄 (S-16) • 実際、大手企業では学校の名によって学生の取扱が違うから (S-34) • そういう社会なら、それなりに勉強するから • 結局はいつもテストによって選別されてきたから (S-92) 	
○「少し同感」とする回答者の理由			
<ul style="list-style-type: none"> • いい学校に入って会社で重役に就くより、資格があって工場などで働く方がいい (S-5) • (いい会社でも、仕事が) その人にあっていなければいけないと思う (S-9) • その人次第のこと (S-11) • まわりを見るとそうになっているから (S-15)(S-22) • 「いい会社」に入っても自分のやりたい仕事ができるとは限らない (S-34) • いい学校や会社に入ってもその人の人格一つで生活はよくも悪くもなる (S-44) • 現実がそうになっているから (S-51) • それなりに努力をした結果だから (S-52) • 日本では仕方ないような気がする (S-55) • (そういう考えは) 間違っていると思うが、いい学校は出た方がいい (S-56) • そういう考えにならなければいけない (S-63) 		<ul style="list-style-type: none"> • 今の世の中お金が必要だから (S-1) • 日本の社会がそういう流れにあるから (S-12)(S-18) (S-42) • 「いい生活」を送ることが幸せとは限らないから (S-7) • 学歴社会が変わってきている、と言われながらも、依然「学歴」が人生に影響を与える (S-25) (S-75) • 人生お金だけではないから (S-41) • 人生、いつ転機がくるかわからない (S-48) • 社会が変わりはじめているから 	
○「同感できない」とする回答者の理由			
<ul style="list-style-type: none"> • 学歴がよくても技術がなければ仕事はできない (S-1) • 学歴だけではどうにもならない (S-3) • 学校と仕事とはちがう (S-4) 		<ul style="list-style-type: none"> • 人間ができていなければならないから (S-3) • 結局最後は自分自身の力にかかってくるから (S-5) • そんなこと、誰が決めたのか (S-8) • 人生は何がおこるかわからないから (S-9) 	

- 世の中頭だけじゃない。いい腕も必要だ。苦勞した人の方が情がある。頭のいいやつは融通がきかない(S-6)
- どの学校を出ようと関係ない(S-12)
- 学力より実力(S-17)
- 人間を学校の成績だけで評価してはいけない(S-18)
- オウム真理教みたいなのがいるから(S-19)
- オウムようになってしまう(S-20)
- それだと人生つまらないから(S-21)
- いい学校を出てもくさったやつはゴマンといるから(S-23)
- 日本人がブランド名で買い物をしているのと同じで、有名だからいいというのが情けない(S-24)
- 自分がバカだから(S-28)
- 友達は学校をやめて仕事をしているが、楽しそう(S-29)
- 人間、みんな平等だから(S-32)
- (そういう図式は)外国人たちの一般化にすぎない(S-33)
- (図式通りだとすると)いい学校に入れなかったらそこで人生が終わってしまうから(S-35)
- 楽な生活はつまらないと思う(S-36)
- どうしても賛成できない(S-39)
- それ(そういう生き方)ばかりが人生ではない(S-40)
- そういう考え方はとてもむかつく(S-42)
- 自分のやりたい仕事につけばいい(S-47)
- そんなのだめだ、間違っている(S-53)
- そんな甘い考え許せない(S-54)(S-59)
- くだらない考え方だ(S-61)
- 一般的に平均値が高く頭のいい人が入る学校に入ったからといって、自分のやりたい仕事に関係した技術などは身につかないし、自分のしたい仕事が生計にプラスになるかはわからない(S-62)
- この世の中にいい学校、悪い学校、いい会社、悪い会社はない。自分にあえばそれがいい学校、いい会社だと思う(S-65)
- 一流会社の社員がみんな高い給料をもらっているわけではない。こういう考え方は愚の骨頂だ(S-10)
- 個性を生かせる会社に入ることが「いい会社」に入ることだと思うが、それは必ずしも「いい生活」につながらない(S-11)
- 自分のやりたいことができるのが「いい会社」。それによって生活がきつくなって構わない(S-79)
- これからは「学歴」が関係なくなっていくと思うから(S-17)(S-45)
- 自分が「いい学校」に入っているとは思わないから(S-18)(S-60)
- 「いい学校」「いい会社」「いい生活」とは何ですか？自分で満足いくかどうかの問題で、客観的に「いい」も「悪い」もない(S-24)
- 「いい」とはそもそもどういうことか。自分自身の努力次第(S-91)
- 人間にとって「いい生活」とは人それぞれ異なるものだから(S-28)
- 「いい生活」は「いい会社」によって成り立っているわけではない(S-31)
- 「いい」かどうかは人によって基準が違う。社会で「いい」とされなくとも自分にとってよければそれでいい(S-32)(S-54)
- 「いい学校」の生徒とはいえ、ピンからキリまでいるので、最終的には人柄とやる気(S-35)(S-68)
- たとえ「いい学校」を出なくとも、努力すれば道は開ける
- 「いい生活」定義は人それぞれだから(S-37)(S-46)
- 「いい学校」に入ったとしても「いい会社」には勤められない
- 人にはそれぞれ個性がある。学校の成績だけで判断するのは差別(S-49)
- 例えばいい家に住んでいても、家庭が暗いということがあるから(S-51)
- 学歴社会には反対だから(S-53)(S-65)
- 学歴だけで人を評価する日本という国に疑問を感じる(S-59)
- 学校で自分の一生を決めたくないから(S-62)
- 「いい会社」でも人間関係がぎくしゃくしていたら幸せではないから(S-73)
- 「いい会社」によって「いい生活」をめざすのではなく、「いい生活」そのものをめざすべき(S-74)
- 中卒で企業の社長をしている人がいる。「いい学校」よりも「いい資格」(S-75)
- 「いい会社」に入っても「いい仕事」ができるとは限らない(S-76)
- 給料が多いことが「いい生活」とは限らない(S-81)
- お決まりのコースを選ばされたロボットのようなから(S-87)
- 今の教育制度のもとでは、本来の才能をつぶしかねないから(S-88)

【表⑱ 卒業後の就職希望】

単位：%

		A 校	B 校	C 校	イタリヤ
雇 用 労 働	大企業で働く	20.0	34.4	21.1	11.8
	中小企業で働く	21.5	26.9	40.8	7.3
	職人企業で働く (イタリアのみ)	x	x	x	0.8
	雇用的専門職 (イタリアのみ)	x	x	x	2.2
	公務員 (地方・国家)	4.6	5.4	5.2	7.0
	小 計	46.1	66.7	67.1	29.1
自 営 的 労 働	自営業の企業/継承	0.0	2.2	0.0	57.4
	独立職人 (日本のみ)	15.4	3.2	6.6	x
	協同組合	0.0	0.0	1.3	3.6
	小 計	15.4	5.4	7.9	61.0
どこでもよい		7.7	10.8	1.3	8.7
さらに進学したい		16.9	8.6	9.2	x

【表⑳ 卒業後の職探し (雇用労働) のルート (イタリア)】

単位：%

雇用労働は探さない	17.4
職安に登録をする	9.5
新聞に求職広告を出す	1.1
新聞の求人欄の応募	9.2
会社訪問をする	9.8
親類・家族の縁故	8.4
友人の縁故	9.0
知り合いの経営者に頼む	10.6
公務員試験を受ける	7.3
雇用情報センターに依頼	4.8
学校にアクセスのあった企業を訪問	7.8

【表㉑ 給料の多寡を決めるものとして納得できる基準は何か】 (複数回答)

単位：%

	A 校	B 校	C 校	イタリヤ
会社に多くの利益をもたらした人	43.1	59.1	47.4	44.3
多くの生活費を必要としている人	15.1	22.6	9.2	3.6
あなたより熟練と経験のある人	64.6	78.5	68.4	11.8
あなたより責任を負っている人	53.8	69.9	48.7	20.2
きつい、苦勞する仕事の人	44.6	61.3	56.6	7.0
あなたより研究開発を行った人	36.9	40.9	25.0	2.5
あなたより年上の人	12.3	17.2	30.3	0.6
給料の多い少ないはなくすべき	6.2	2.2	1.3	6.7

【表② 就職先選択の基準は何か一上位3つ】（複数回答）

単位：％

	A 校	B 校	C 校	イタリ ア
第 1 位	給料がいい 60.0	自己能力発揮 45.2	給料がいい 59.2	経営が安定 58.6
第 2 位	自己能力発揮 41.5	経営安定 34.8	休みが多い 42.1	給料がいい 51.0
第 3 位	休みが多い 26.2	給料がいい 28.0	自己能力発揮 27.6	系統的経験 31.9 自己能力発揮 30.5

* 選択肢群 給料がいい／経営が安定している／通勤がきつくない／社会に認められた会社／自分が会社に認められる／自己の能力を発揮できる／自分個人の判断が活かせる／特技を活かせる／仲間とよい関係が結べる／仕事経験の系統性／人との接触がある／労働時間が少ない／出張が多くない／休みが多い／仕事の密度が高くない／仕事が単調ではない／福利厚生が充実している／その他の18種の選択肢から当てはまるもの3つ以内を選択

【表③ 職場生活で重視すること】

単位：％

	A 校	B 校	C 校
仕事に打ち込み自分の技術を向上させる	29.2	35.5	27.6
企業の業績を向上させる	10.8	1.1	7.9
作った製品を通して社会に貢献する	3.1	8.6	6.6
昇進し他人よりも責任ある立場に立つ	7.7	2.2	9.2
仲間との人間関係を大切にする	27.7	41.9	26.3
労働運動に携わり要求を実現する	0.0	0.0	2.6
社内でのスポーツや趣味に打ち込む	3.1	2.2	2.6
その他	1.5	0.0	3.9
生計を立てること以外特に意義はない	6.2	4.3	2.6
無回答	10.8	4.3	10.5

* イタリアはやや異なる質問形式のため比較不可能

(1996. 10. 1 受理)

注

1) 本設問に列举された仕事内容のリストは、都立工業高等専門学校の進路指導（ただし94年度時点）を担当された石田良男教授（実験計画法、工学実験）から教えていただいた技術教育の三段階を、さらに質問制作者の方で細分化したものである。石田教授は、以下のような三段階を設定する。

- ① 新たな基礎理論の構築とそれに基づいた本格的な開発（工学系大学大学院ドクターコース）
 - ② 設計／生産技術／生産管理／営業技術など、実際にものをどうやって作っていったらよいかを検討→「ものづくりのソフト編」（4年生大学工学部／工業高専／工科系短大）
 - ③ 設計図に基づいての製品製造→「ものづくりのハード編」（工業高専／工科系短大／工業高校）
- むしろ実際の製造現場、とりわけ中小企業では②③の区分は曖昧である。場合によっては、①開発にまで

仕事の領域が及ぶことも少なくない。また、いくら①②の段階で緻密な設計図が描かれても、それだけでは製品は形を成さない。③の部分で長年の勘に基づいて図面に書かれない補正を加えたり、設計そのものの変更を提案したりといったことが行われ、それらが②との往復運動を経た後、はじめて製品化が可能になるという。

なお、付言すれば、①②③はものづくりの体系において上下関係を示すものではない。大田区におけるヒアリングの随所で「ものづくりが《どうつくるか》に固執する段階はもう終わった。これからは《何をつくるか》にエネルギーを費やすべきだ」という意見に遭遇した。①からは、社会が切実に何を必要としているかは引き出されない。社会との交信をはかりつつ、「社会的に有用」なものづくりを果たしていくのは、②および③の部分であるからだ。